

地域 の 和食

参考文献
『美濃最勝神宮』 聖福寺HP
http://www.shofukujiji.or.jp/about/index.htm
『お茶百科』 伊藤園HP
http://www.ocha.com/components_and_health/benefit/greentea/
納言堂 2004 『明恵』 『日本大百科全書』 小学館 (編)、小学館 (発行) パニーボンパナ Professional Win&E
山本久夫 2014 『日本人の「食」 その歴史と食文化』 海鳥社
平田公一 『中国茶の歴史1』 『神農と茶の発見』 All About HP
http://allabout.co.jp/gm/gs/218670/
東野根村教育委員会 (聖仙寺跡) 海鳥社
『お茶ミュージアム』 静岡・お茶の市川園HP 『お茶と歴史』 静岡にお茶を伝えた三國館～お茶のまちの関根～』 http://museum.ichikawaen.co.jp/history/shizuoka.php
吉村農 1982 『専ら茶の道は太陽の道—聖園台園編 その1—』 実教古代史学出版部
藤原徳基昌太郎 2014 『茶界編の小島島—茶界編島島である』 電子版『歴史研究』、歴史研究会
http://www.rekishikan.com/denshiban/toku/ocha007-2014-11-08.html
小島小学校創立百周年、小島中学校創立五十周年記念実行委員会 1998 『海鳥』 海鳥社
吉田扶希子 2013 『春振山頂の御座 西日本地域を中心として』 中国出版
山口哲也 2012 『小呂島の夏』 歌詞の解釈』 福岡市立小呂小学校HP
http://www.fuku-c.ed.jp/schoolhp/cloro/waimedetakai.pdf
山口哲也 2012 『小呂島振山頂の起源についての考察』 福岡市立小呂小学校HP
http://www.fuku-c.ed.jp/schoolhp/cloro/yamaakaakigen.pdf
井上宗徳 『南方録 (聖徳書写本)』 茶道南方説HP
http://www.asahi-net.or.jp/~r15t-ml/Sendo/nampo-sathana.html
藤原徳基昌太郎 2012 『茶の歴史』 宮木武蔵資料館HP
http://www.goseiciti.jp/themusuai2de/houkin01100.html
藤原徳基昌太郎 2010 『茶の道と賞前 利休の足跡と「南方録」の系譜』 海鳥社

時代が下って江戸時代の博多では、茶道の南方流が立花宗山によって復興された。東山が興した南方流は、広く博多の文化となっており、博多山笠の直会では、広く振る舞われていた。
東山の弟拙者が兄開縁の文武両道にたけた人物で、南方流の免許状を受けた。東山は三代当主黒田四郎の死によって失脚、憤死する。東拙は兄に連座してその後、年間小呂島に「流罪」となっていた。
(『流罪』2010)。

YAMAGUCHI Tetsuya

昭和46年福岡県生まれ。福岡市立早良中学校教諭、福岡教育大学特別理科(地学)専攻、「可能性にあふれる小呂島のおと—自然・歴史」(日本龍巻展覧会センター機関紙 季刊「しま」2013年9号)、「離島における地域の素材を活かした教材開発と児童生徒とともに行う理科研究」(平成26年度日本教育公務員弘済会教育論文奨励賞受賞)。

博多山笠で男衆に振る舞われる南方流のお茶 (提供:WavDaFotoギャラリー)



図5 春振山頂から見る玄界灘 (筆者撮影)



図4 承天寺にある光勝院は玄界灘をあらわしている (筆者撮影)



図3 今も残るこの護摩法堂前の茶園 (筆者撮影)

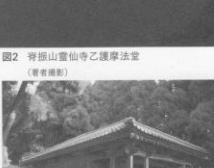


図2 春振山笠山頂の護摩法堂 (筆者撮影)

ところで、小呂島の夏の風物詩である小呂山笠で歌い継がれている「小呂祝いめど」は江戸期に成立したものであるが、東拙が作詞に絡んでいる可能性がある(山口2010)。
沖のとなりに、茶屋たてて、上り下りの船を待つ、エイショヨエ、エイショウエー。歌詞にひびく「茶屋」を入れるこのフレーズは、1番から6番まである唄の最後には必ず入る。玄界灘の沖の途中に茶屋(保島島)を建てた(と)は、小呂島開拓世代の心意気を歌ったものではあるが、「茶屋」という言葉を選択するセンスはやはり茶人の発想だろうか。小呂島に滞在したことが確実視される者の中で、東拙以外に茶人はみあたらない(海原)。

私は、東拙が兄の失脚、憤死による連座にあたり、むしろ古代の日本の神の神聖地である玄界灘小呂島に小呂島行きを自ら望んだ可能性もあると考え、それは、茶人としての美意識を極め「延命の秘術」を伝授し、広く普及するための修行だった気がしてならない。

上宮からは茶後神ノ島も遠く見渡せ、参拝する方位は小呂島への方位だ。参拝方位は下宮も同様である。
つまり玄界灘の島々の神を祀った風俗がある山岳信仰の聖地に、宋西は最初の茶畑を作ったこととなる。この春振山の茶畑が宋西により明恵上人に送られ、それを梅尾に継いだのが宇治茶の元となった(藤原2014)。
ちよんから運れたこと100年、円爾が中国から持ち込んだ茶種は、静岡(駿河産)にも継がれた。これが静岡茶のはじまりかともいわれる(富説)あり。円爾は博多承天寺を建立したが、承天寺には玄界灘をモチーフとした流罪院という下庭がある(富説)。承天寺の仏殿(金堂)にお参りするその背後にある流罪院の神形となる。つまりこれにも玄界灘の島々の神を祀った形跡がみられるように思う。承天寺の仏殿(金堂)正面には、皇族参拝用の勅使門であるのだ。

博多で茶を追いかけたい、必ず玄界灘の島々をアミます。ならば、むしろお茶の伝来時において「お茶は玄界灘の「香り」をとらける役目をしていたのでないか」と思いたくはない。なぜなら、玄界灘は神代の園生み神話の主要な舞台の一つだからだ(図5)。

地域 の 和食

まらなかつたのはそのせいではないか。
ところが、宋西が日本に持ち込んだ栽培が始めることで、茶は雑草から狭く間に広がっていく。お茶の風気ましという実用的効能が力を発揮したことは想像に難くない。しかし、米の広がりには、別の観点があった可能性を考えた。

宋西が最初の茶畑を作ったのは、春振山笠山頂石上坊とされている。もちろん博多聖福寺にも茶畑を作ったが、わざわざ春振山頂に茶畑を作ったのはなぜだろうか。春振山は、北は博多湾、南は佐賀平野や有明海を望む10.5kmの北部九州の代表的な山である。古来、山岳修験験場の聖地とされる。その信仰は、南は霧島、東は京都まで西日本の様々な場所に残っている形跡がみられる(吉田2013)。古事記の時代にさかのぼる古い信仰であり、春振山笠山頂(和銅2年709)元明天皇の御命により、漢書上人が開山したと伝えられており、平安時代から鎌倉時代には背振山一帯に約40haにわたり、寺坊などが90ヶ所ほど点在していた九州一の大地蔵だった。現在はその中心の坊の一つであった護摩法堂(図2)が残るのみであるが、茶畑が今も残っている(図3)。元明天皇は古事記が奏上された時の天皇で、即位前名を阿閉皇女という。今も残るこの護摩法堂にお参りする、その方位は背振山を越えて玄界灘の相島となる。相島はその古名を阿閉島といひ、元明天皇の御、阿閉皇女と一致する。

さらに、春振山頂には春振神社土宮があり、上宮の祭神は市杵島姫(茶後三女神の柱)と升野天女である。上宮からは茶後神ノ島も遠く見渡せ、参拝する方位は小呂島への方位だ。参拝方位は下宮も同様である。
つまり玄界灘の島々の神を祀った風俗がある山岳信仰の聖地に、宋西は最初の茶畑を作ったこととなる。この春振山の茶畑が宋西により明恵上人に送られ、それを梅尾に継いだのが宇治茶の元となった(藤原2014)。
ちよんから運れたこと100年、円爾が中国から持ち込んだ茶種は、静岡(駿河産)にも継がれた。これが静岡茶のはじまりかともいわれる(富説)あり。円爾は博多承天寺を建立したが、承天寺には玄界灘をモチーフとした流罪院という下庭がある(富説)。承天寺の仏殿(金堂)にお参りするその背後にある流罪院の神形となる。つまりこれにも玄界灘の島々の神を祀った形跡がみられるように思う。承天寺の仏殿(金堂)正面には、皇族参拝用の勅使門であるのだ。

図1 「健康的な体づくりに効果的な緑茶」(伊藤園HPお茶百科)

Table with 4 columns: 成分, 効能, 成分, 効能. It lists various components of green tea like Catechins, Caffeine, and Theanine, and their health benefits such as antioxidant effects, fat burning, and stress relief.

うに分析的に把握がすんだことによる重伝、販売の効果によるものであろうか、古代においてお茶への健康イメージはどのように形作られてきたものであろうか。
宋西がお茶を日本へ栽培するより昔、「日本後紀」には、815年に「観天天皇に大僧都永忠が近江の梵相寺において日本茶を贈じた」とあり、これがわが国におけるお茶の喫茶の始まりの記述といわれている。この頃のお茶は非常に貴重で、僧侶や貴族など限られた人だけが口にできるものであり、一般に普及することにはなかつた(伊藤園ホームページ)。

一方、中国ではお茶は神農という古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人とも語られる。神農はあらゆる野草を自ら食し、その薬効と毒害とをまため、人々に広めた。これらのことから医薬と農業を司る神「神農大帝」と尊称されている。あるときは1日に72回もの中毒症状を起こした。あまりにも多くの毒をためたためか、そのせいで最終的に亡くなったのである。この神農が日頃中毒を起こすたび「解毒剤」として服用していたのが茶だ。つまり中国で茶を語るべき、神と結び付いた神秘的な万能薬として民衆に広まっていたのだ。しかし、日本において神農はなじみがない。知識階級から茶が広

地域 の 和食

生き物を活かす知

お茶

博多玄界灘とお茶

福岡

山口哲也